

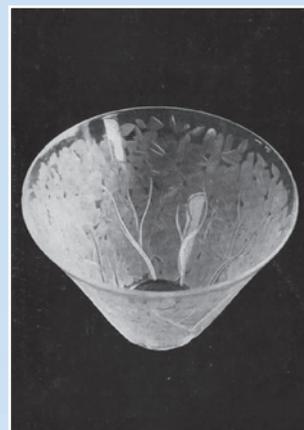
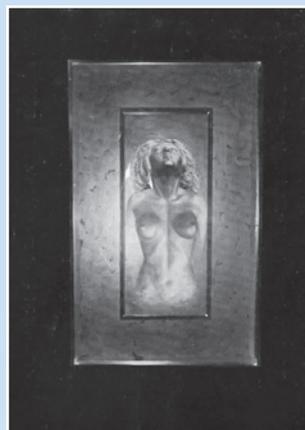


明治時代の工芸ガラスについて



ガラスを大量生産する方法がなかった明治より前は、ガラスと言えば多くは装飾用または観賞用の器物に限られていました。4000年前のエジプト時代に既にガラスが工芸品として製作されており、わが国にも奈良・正倉院ガラスの様な古い工芸ガラスもあります。それが明治の末期、ガラス製造工業が長足の進歩を遂げ始めると、ガラスは実用的用途に向けられていきました。

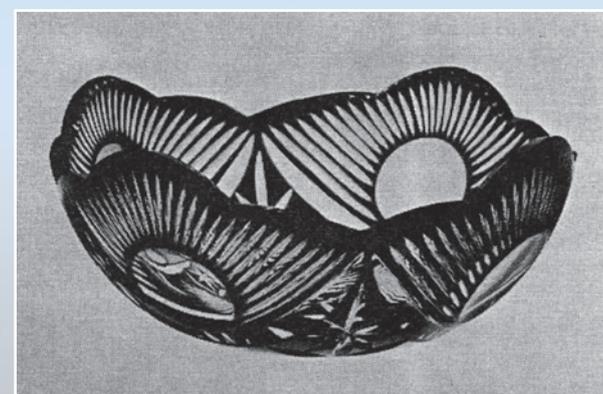
明治末期から昭和の初めにかけてのある時期には、ガラスの実用的利用が重視され、その工芸的価値と応用が忘れられた



空白の時期があったとも言われています。

ガラスの独特な性状が世間に認められ、工芸的な材料として注目されていくのは大正末から昭和の初めにかけて。この時期にはガラス工業会の内からも工芸思想への傾倒が見られ、多くの工芸ガラスが世に発表されます。この時代になると岩城硝子製造所もさまざまな工芸ガラスを製作しており、わが国のトップ水準をゆく技術を持つ企業として、高い評価を受けていました。

「ガラス工芸のうち、最も古く行われていたのはカット加工法であった。明治の終わりから大正時代にかけて、カットガラスの優れた



岩城滝次郎 作

製品を作っていたのは、東京では岩城岩太郎、岩城硝子製造所(岩城倉之助)であった。」(日本ガラス工業史)滝次郎は、明治18年(1885)にエッチングガラス(腐蝕ガラス)も製作しています。また、工芸ガラスの一つであるスタンドグラスについても、岩城滝次郎が明治35年(1902)に米国から帰国後、商品化に成功しました。

